

「中国蒙元史学術研討会暨方齡貴教授 90 華誕慶祝会」参加報告

船田善之

2007年8月6日・7日の両日、中国雲南省昆明市において、「中国蒙元史学術研討会暨方齡貴教授 90 華誕慶祝会」が開催された¹。この会議は、名称の通り、中国を代表する蒙元史研究者である方齡貴氏の卒寿祝賀と連動し、中国元史研究会・中国蒙古史学会・雲南師範大学によって主催された国際会議である。

方齡貴氏は、ゴルロス前旗（現在の吉林省前郭爾羅斯蒙古族自治県）出身のモンゴル族で、日中戦争期に西南聯合大学・北京大学に学び、姚從吾氏と邵循正氏に師事された。修了後は、昆明師範学院（1984年に雲南師範大学と改称）で副教授、後に教授として教鞭をとり、1987年に退職された²。代表的な学術論文は、『元史叢考』（民族出版社、2004年）に収められている。また、『元明戯曲中的蒙古語』（漢語大詞典出版社、1991年）とこれを大幅に増補した『古典戯曲外来語考釈詞典』（漢語大詞典出版社、2001年）、及び『大理五華楼新出元碑選録并考釈』（方齡貴・王雲選録、方齡貴考釈、雲南大学出版社、2000年）・『通制条格校注』（中華書局、2001年）といった工具書や史料校注によっても斯学に大きく貢献されている。

会議の席上で配布された『中国蒙元史学術研討会暨方齡貴教授 90 華誕慶祝会 会議手冊』には、41篇の報告論文の要旨が収められていた。会議の性格上、招聘対象者を限定したとの話で、最近の中国元史研究会や中国蒙古史学会主催の国際会議と異なり、中国国内の大学院生・博士後（ポストドクター）の姿は、昆明在住者を除けばほとんどみられず、また海外からの参加者も韓国の裴淑姫氏（当時は浙江大学歴史系博士後・雲南大学歴史文化学院客座副教授、現在は慶尚大学校人文学研究所教授）・楊惠淑氏（当時ウランバートル大学博士課程在籍）と私の三名だけであった。



写真 1：開幕式

¹ 中国で発表された参加報告に劉迎勝「中国蒙元史学術研討会暨方齡貴教授九十華誕慶祝会述評」（『中国史研究動態』2008年第2期、15-17頁）がある。なお、海外の国際会議の概要を迅速に国内で報告することは参加者の義務であると考えている。筆者の怠慢により、本会議の参加報告を提出するのが大変遅れてしまった。ご寛恕を乞う次第である。

² 方齡貴氏の経歴については、氏自らの筆による「我和蒙元史研究」（『元史叢考』中華書局、2001年、327-344頁）。初出は『学林春秋』（初編）朝華出版社、1999年に詳しい。

開会前日の8月5日がレジストレーションに充てられ、現地調査³のため8月3日夜に昆明入りしていた筆者は、昆明市西部の寺院調査を終えてから、15:30頃に、蓮花賓館で参加登録を行った。

翌6日8:00集合後、バスに乗り込み、8:20雲南師範大学に到着した。8:40より開幕式(写真1)が始まった。実質的に「方齡貴教授90華誕慶祝会」の部である。チメドドルジ(斉木徳道爾吉)氏の司会で、劉迎勝氏らによる祝辞、記念品の贈呈が行われ、方齡貴氏自ら答礼の挨拶を述べられた。その後、屋外で記念撮影。方齡貴氏は高齢のため学術会議の部には出席されないこともあり、この間、旧知の研究者らと旧交を温めておられた。続いて、11:00

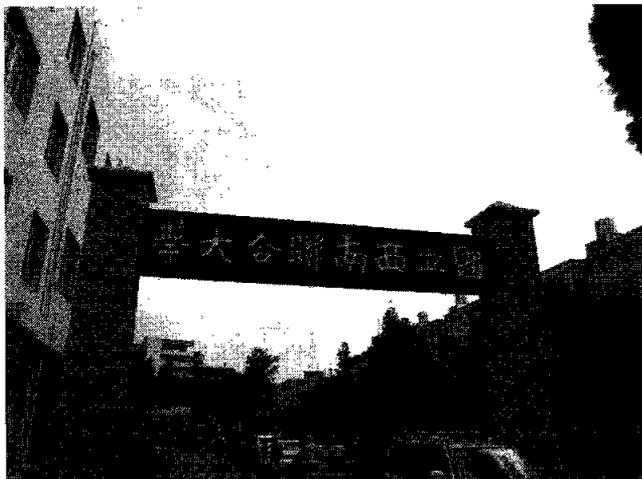


写真2：国立西南聯合大学址

までエクスカージョンとして雲南師範大学キャンパス内に併設される国立西南聯合大学紀念館・“一二・一”運動紀念館を參觀した(写真2)。ホテルに戻り、12:00から祝賀パーティーを兼ねた昼食。

14:30より蓮花賓館にて中国蒙元史学術研討会の部が始まった。参会者はそれぞれ分科会に分かれ、筆者は第一小組に出席した。チメドドルジ氏の司会により、陳高華、周良霄、陳得芝、周清澍、劉迎勝、杜玉亭、韓志遠、孟繁清、尤中、蔡志純が提出論文を報告した(以下、報告者氏名については敬称略)。質疑、討論も白熱し、予定時間をオーバーして17:50に終了した。

翌7日は終日分科会。8:20より午前部の部が始まり、蔡志純氏が司会を務め、陳世松、チメドドルジ、ポインデルゲル(宝音徳力根)、任崇岳、匡裕徹、船田善之、李桂芝、方鉄、裴淑姫が報告。昼食をはさんで、14:40より再開。周良霄氏の司会で、波・小布、劉曉、張帆、王曉欣、徐文堪、楊璋、郝維民が報告を行った。最後に劉迎勝氏が学術会議を総括した。一部の参会者は8日・9日の両日、大理におけるエクスカージョンに赴いたが、筆者は、8日早朝の便で昆明を離れた。

この会議の前月に開催された「成吉思汗与六盤山国際学術研討会」⁴に引き続いて、中国の蒙元史研究者による成果公開の勢いが加速していることを強く感じた。中国の大学・研究機関における研究環境の向上が反映しているのであろう。

以下、個人的な所感に止まる部分もあるが、個々の報告論文や質疑の状況について述べておきたい。張帆「從《元典章・新集》的一条文書看元朝中後期的御前奏聞決策機制—兼析《新元史》等書的相关謬誤—」や劉曉「元代公文起首語初探

³ この調査を通じて、船田善之「雲南におけるモンゴル史関連の史跡・文物の現状」(『日本モンゴル学会紀要』第36号、71-74頁)の情報を修正する必要が生じた。近日中に簡報を提出したい。

⁴ 船田善之「成吉思汗与六盤山国際学術研討会」参加報告(『13、14世紀東アジア史料通信』第9号、2009年、16-18頁)。

一兼論《全元文》所収順帝詔書等相関問題一」などは、特定の史料を徹底的に分析することにより研究を深めていく手法がとられている。孟繁清「内丘扁鵲廟的元代碑刻」は、石刻史料の紹介とそれに基づく緻密な研究であった。また、チメドドルジ「関于黒城文書的問題」は、内蒙古大学・早稲田大学のハラホト出土モンゴル文書に対する共同研究の成果を披瀝するものであり、参会者の注目を集めた。こうした報告論文やそれに対する参会者の反応から、学术交流がボーダレスとなった状況の下、研究者の指向・手法、石刻・文書史料への大きな関心と期待、学界の動向が共有されつつあることを実感することができた。中国の蒙元史学界において、日本の研究は早くから高い評価を受けていたところであるが、今まで以上に国際的な発信が求められていくだろう。

方齡貴教授の卒寿を祝賀するというので、今回の国際会議には、中国の蒙元史研究者の大家の多くが参集していた。彼らの研究に対する情熱に直接触れることができたことは、若い世代の研究者にとっては幸いだった。質疑・討論の際、互いにファースト・ネームで呼び合いながら、蒙元史研究の根本的な問題を議論する様子は、中堅から若手の研究者にとって大いに刺激になったはずである。陳得芝「元代多元文化社会的言語文字問題」・陳高華「元代女性的文化生活」などからは、幅広い視野と該博な知識、そして新たなテーマに挑戦し続ける姿勢を感じ取ることができた。

なお、本会議の報告論文から掲載論文を選出して論文集が刊行されることになっている。現時点ではまだ刊行されていないようだが、ほぼ刊行の見通しがついたとの話を昨年耳にした。他の注目すべき論文の詳細については、こちらに譲りたい。末尾ながら、この国際会議の主催・運営に携わった方々に改めて謝意を表したい。

(ふなだ よしゆき 九州大学)